

第2章 研修内容の摘要

第2章 研修内容の摘要

1. 合同研修前期

期間：平成27年8月31日（月）～9月4日（金）

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

図表4（合同研修前期 研修日程表）

| 平成27年度 アウトリーチ（訪問支援）研修 〈合同研修前期・日程表〉 | |
|--|--|
| 於：国立オリンピック記念青少年総合センター | |
| 平成27年8月31日（月） | |
| 13:30～ | 開会の辞（内閣府青少年支援担当） |
| 13:40～15:00 | 平成26年度研修生「アウトリーチ（訪問支援）研修から学び得られた事柄と実践」 沖縄県子ども若者みらい相談プラザsorae（沖縄県子ども・若者総合相談センター） 特定非営利活動法人サポートセンターゆめさき/ 臨床心理士 松本 大進 氏 |
| 15:10～17:00 | 各研修生の活動紹介（自己紹介） |
| 17:10～18:00 | 実地研修に伴う受入団体との情報交換 |
| 18:00～ | 事務連絡 |
| 9月1日（火） | |
| 9:30～17:00 講義・演習① | 「地域の関係機関・社会資源を活用した支援とソーシャルワーク論」 久留米大学文学部社会福祉学科 教授 門田 光司 氏 |
| 17:10～17:30 | 講義・演習から学び得られた事柄に関するワーク |
| 9月2日（水） | |
| 9:30～17:00 講義・演習② | 「アウトリーチと重層的な支援ネットワークを活用した多面的アプローチ①」 特定非営利活動法人 NPOスチューデント・サポート・フェイス 代表理事 谷口 仁史 氏 |
| 17:10～17:30 | 講義・演習から学び得られた事柄に関するワーク |
| 9月3日（木） | |
| 9:30～17:00 講義・演習③ | 「アウトリーチと重層的な支援ネットワークを活用した多面的アプローチ②」 特定非営利活動法人 NPOスチューデント・サポート・フェイス 代表理事 谷口 仁史 氏 |
| 17:10～17:30 | 講義・演習から学び得られた事柄に関するワーク |
| 9月4日（金） | |
| 9:30～12:00 講義・演習④ | 「教育機関におけるアウトリーチとその実践」 臨床心理士/学校教育支援スクールソーシャルワーカー 川村 達也 氏 |
| 12:10～ | 閉会の辞（内閣府青少年支援担当） |

合同研修前期の講義・演習で学んだ事柄について研修生が提出したレポートを以下に抜粋する。

図表 5 (合同研修前期 - 研修生レポート／一部抜粋・語調整理)

平成 26 年度研修生「アウトリーチ（訪問支援）研修から学び得られた事柄と実践」

■研修生レポート（1）

「アウトリーチ＝訪問支援」は、家庭内に引きこもる当事者が訪問支援を希望しない場合が多く、当事者の家族や周囲が引きこもる状態や、家庭での関係の難しさから自身の不安を覚え、耐えきれなくなったり、まずは電話やメール等で相談してくる。子どもや若者が引きこもる原因は様々であるため、相談を受けて、単にすぐ訪問・支援をするのではなく、当事者の状態や当事者を取り巻くあらゆる情報を収集し、支援に取り組むことが絶対条件であり、支援者が当事者に関わる場合の一番はじめに行うべきことである。

○当事者の情報収集・事前準備の重要性

まず支援体制を整えること。講師が実地研修を行った NPO スチューデントサポートフェイスでは、代表の谷口氏をはじめ、専門的な資格や経験を有するスタッフやボランティアが所属をしているが、当事者の状況によっては、単一組織だけでは対応できない。そのため、病院や警察、児童相談所、学校等々、当事者の保護者との面談から、好きな事や NG ワード、他専門機関との関わり・履歴など当事者の詳しい情報を得て、必要な機関とも繋がりを持つことが必要。

これは、当事者の引きこもりは、やがては社会復帰へということを中心に考えながらも、支援する組織自身が継続して支援（業務の肥大化、訪問時の支援者のリスクマネジメント）して行くことができなくなってしまうことを防ぐことのためにも必要なことである。

（実際の訪問時に当事者に合った訪問者をマッチングする。できるだけ多くの支援者がいればそれだけマッチングできる人材が増えることにも繋がるだろう。）情報を収集したら、スタッフでケース会議を行う。当事者の訪問・面談前に当事者について、当事者の周囲についてできるだけ多くの情報を得る。

保護者の了解を得られれば、当事者が関わりをもっている他専門機関からも情報を得る。

例えば、当事者の好きなことが分かれば、そのことがらについて徹底的に調べ、覚え、支援者自身が好きになることで訪問の際の会話の材料にする。「ここまでやるのか」と子どもたちに対する強烈な信念と熱意を感じたとのこと。

実地研修時は、8 件のアウトリーチに同行されたが、いずれの件についても「事前準備」をいかに行うかがキーで、最も重要なことである。

■研修生レポート（1）

＜「ソーシャルワーク＝社会福祉」の目的＞

誰もが公平であわせな生活を過ごせる社会を目指すことであり、特に生活支援を必要とする人たちへの取り組みが求められている。

＜社会福祉の歴史から＞

アメリカへの移民から移民者の貧困

1866年から1917年にかけてヨーロッパからアメリカに移民した人たちの人数は毎年20万人以上。1890年にかけては南欧や東欧から900万人が移民した。そのため、ニューヨークやシカゴなどは、人口密度が著しく、6人の内5人が貧困な状況にあった。当時、慈善組織協会は、貧困は対象者の怠学・怠慢な生活状況からくるものと考えていた。

慈善組織協会は、その貧困者世帯へ「訪問支援」として「友愛訪問」を行っており、これが今日のケースワークに繋がっている。

また、当時友愛訪問を行った訪問員は施与ではなく「友人」としての活動の標語として訪問し貧困者の家庭訪問で「友情」を通して適切な助言を与え、貧困からの離脱を援助した。

（善意組織協会と貧困家庭において訪問者は、対象者＝子どもの置かれている状況は、家庭の状況からくるものが多いという視点を持つ人が生まれ、①訪問支援：支援をする側の視点 ②友愛訪問：支援を受ける側の視点 を持った人が居た。）

貧困状態にある子ども・家庭に対して以下の支援・運動が生まれた。1889年ジェーン・アダムスがシカゴのスラム地域に「ハル・ハウス」を設立し、貧困地域での住民相互扶助に基づいて「機織り・裁縫講習会」「子ども会」「学習支援」等を行い、貧困で無力な住民を奮い立たせ、更には社会を改良して行くことへの拠点となる「社会改良運動」＝「セツルメント運動」を行った。

1906年～1907年 子どもたちの教育保障に向けたセツルメントハウスのワーカー取り組みの柱は、「子どもの貧困」「児童の労働問題」「教育機会の保障」であり、これが今日のスクールソーシャルワーカーの起源となった。

- ①学校に子どもの家庭状況を理解してもらう。
- ②教師に子どもの家庭状況を理解してもらう。
- ③保護者に学校や子どものニーズを理解してもらう。

支援が必要とする対象者＝子どものニーズ・気持ちに立って考え支援すること。子どもの権利を守るアドボカシーが生まれた。（日本では、子どもに対して保護者からの虐待のない、学習・保育の義務をも果たしていない状態ではあるが、その子どもが主張しない場合は、児童相談所等がその家庭に踏み込むことができない規定になっている。その反面アメリカでは、子どもに対して、保護者が生活・学習等養育意欲の無いと判断された場合は、即その保護者を罰する規定がある。）

＜怠学要因：貧困・疾病・崩壊家庭＞

1918年～1920年の訪問教師の報告では、職務の比重で高い順は、「訪問」「クリニック」「面談」である。訪問先としては、家庭・学校・他機関で、家庭への訪問は全体の半数以上を占めていた。訪問では子どもの生活条件の確認や子どもの福祉を阻害することを取り除くことで、状況改善に繋げることが目的であった。

しかしながら、社会福祉（ソーシャルワーク）実践の起源には、「家庭訪問」と「アウトリーチ」がある。

家庭訪問の目的：社会福祉サービスや情報提供のために、当事者の家に出向くこと。当事者が期待していない訪問をする場合もある。アウトリーチの目的：家庭に出向き、当事者にサービスの情報やサービスそのものを提供する。

基本的には、日本では支援を必要としている人から相談に行く（申請義務）必要がある。しかし、アウトリーチは、相談意欲が低い当事者に対して、支援者が出向いて行くことが基本である。

アメリカの脱施設化後の課題から、大規模な支援施設から地域のグループホームへと変化さ

せていったことによって、多数のホームレスを生んだと言われている。
そこから、貧困や支援を必要としている当事者の状況によって、援助にありかたを考える「ケースマネジメント」の必要性が考え出された。

<アメリカのケースマネジメントをモデルに>

①利用者指向＝当事者のニーズを尊重する指向と②システム指向モデル＝限られた財源の範囲の中での支援があると考えられ利用者指向モデルのケースマネジメントを基に「地域生活のための手法」が考え出された。

ケースマネジメント：①多様なニーズを持った人々が②自分の機能を最大限に発揮して健康に過ごすことを目的として③フォーマル及びインフォーマルな支援と活動のネットワークを組織し、調整し、維持することを計画する人やチームのことをいう。

<ケースマネジメントの展開過程>

アウトリーチ：家庭に出向き当事者・家庭にサービスの情報やサービスを提供

アセスメント（ニーズ把握）→支援計画→アドボカシー→支援計画の実行→評価（モニタリング）→アドボカシー：個人やグループを直接代弁し、権利擁護し、支援していくこと。

（ケースアドボカシー、クラスアドボカシー、セルフアドボカシー）

<訪問（アウトリーチ）に際して>

事前に当事者の情報を家族や他相談機関から得ておく。

ウィークネス（問題要因・弱さ）の視点からではなく、ストレングス（良い点・強さ）の視点に着目した関係づくりを目指すことを目指すこと。

（支援者側の視点ではなく、当事者側の視点に立って上記の展開過程に取り組むこと。）

ウィークネス（弱さの視点）や問題の視点では、医者や専門家の立場から当事者を見た時に考えられること。まず原因を探る（医学モデル）となり、人間が抱える問題が個人の要因にあるものとする。その原因を専門家が診断・確定し、治療・取り除くことが重要視される専門家主導の視点となり以下のような状況を生む。

○引きこもる人たち

a: 問題・欠陥・病状

b: 不摂生な生活・抑圧

c: 貧困

d: スティグマ（負のレッテル）

ストレングス（強さ）の視点では、当事者の持つ長所・才能・良さに目を向け、当事者主体に考えられ、当事者のニーズに沿った支援、支援結果についてのアセスメント（評価）ができる。

ウィークネスの視点・ストレングスの視点

不登校の子どもが朝、登校のために制服を着たが、登校できなかつた。発達障がいの子どもので、授業中長く座っていることができず、頻繁に離席する。

問題志向（原因） ← 状況 → 未来志向（望ましい結果）

過去 未来

何がまずいか 何がうまくいきそうか

問責 前進

強制 影響

専門家が素人に教える 協力し合う

欠点（ウィークネス） 長所（ストレングス）

定義（分析・意味づけ） 行動

<事例から>

・支援計画を考える

短期計画：おおよそ1～3ヶ月以内の支援計画を立てる。

計画のポイントは、①誰がいつ②どのように具体的な支援を実行していくのかを明確にすること。留意点は、特定の人や機関に過剰な責任や負担がかからないよう全体で配慮していく必要がある。

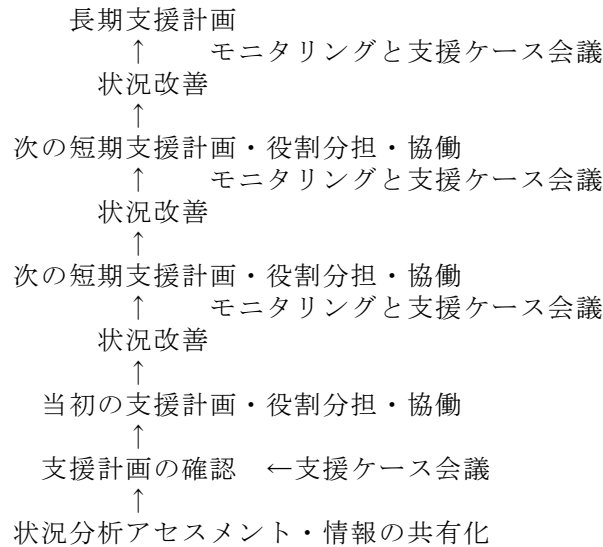
計画を立てる際には情報共有→共通認識→目標設定→役割分担 の手順が大切

長期計画：おおよそ3ヶ月以上の期間を想定し、短期計画の積み重ねによりたどり着くものである。

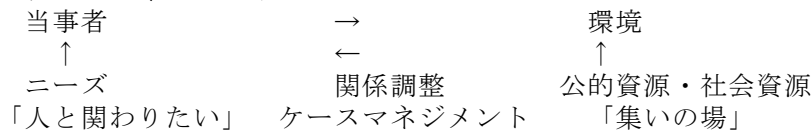
支援機関：支援機関名、担当者名、連絡先等、共通の支援計画シートに記載しておく。

支援計画の策定ポイント：実現可能な計画をチームで作り上げ、立てること。

<支援計画>PDS サイクル (Plan・Do・See) に則って支援のプランを立て、支援を実行し、支援・計画を評価し、就労に向けた支援を行う。



<ケースマネジメント>



<アウトリーチ・ケースマネジメント>

電話や相談室での相談業務ではなく、当事者が生活する環境に働きかけること。支援者はその環境で困難を感じている当事者のニーズをアセスメントし、当事者と一緒に目標設定や支援計画を立てる。特にストレングスに視点を重視し、「訓練から職場へ」という考え方ではなく、「利用者の関心のある職場→訓練→職場」という考え・支援を行う。

また、社会資源の活用・開発は、ケースマネジメントの核となり、当事者のアボケイト、ニーズの代弁、スティグマの払拭に繋がる。

<事例からグループワーク>

事例・当事者のジェノグラム（家族構成やその関係性・家族図）を基に誰が・いつ・どのような具体的な支援を行うのかグループで話し合った。

当事者の状況を改善するのに効果的か、支援の内容は具体的か、支援の実施は可能かということ念頭に置きながら、家族の関係や状況改善が当事者の改善に繋がることであると分かれば、その家族についても支援をしていく。

そうする中で、一人の支援者や単一機関では支援仕切れないことがある。その場合は、他機関とも繋がり、連携をしながら支援に取り組むことが必要になった。

- ・当事者にとって相談しやすかった適応教室の指導員の存在。
- ・高校生年代の受け入れができない適応指導教室への働きかけ。
- ・当事者のプライドを傷つけない配慮（兄的存在となって教室の子どもたちへの関わりを提案）そうすることで、他者との関わることに繋がる。
- ・上記と並行しながら、当事者が家族以外の居場所づくりをすることで母親の負担を軽減することや父母親には家族会を紹介し、関係が良くなかった父と母が協力しながら当事者の支援に関わること。
- ・当事者の興味・関心に沿い、ハローワーク等の繋ぎ、就労に向けた支援

■研修生レポート（２）

本講義では、ソーシャルワークの起源における家庭訪問及びアウトリーチについての歴史的背景について学んだ。相談者を主体に支援していく上で、関係機関が社会資源や環境をどのように活用するか事例から学ぶことができた。

午後は、支援計画を検討する演習を行い、短期支援計画では具体性のある計画で、効果的な支援になると考えられた。また、短期支援計画を立てる際にはアセスメントが重要であり、細かく正確に把握すること、偏った意見でないことも重要であると感じた。グループワークを行なった際に、①だれ（人・機関）が、いつ（いつまで）②どのような具体的な支援をしていくかをディスカッションしていく中で明確にし、情報共有の擦れをその場で修正することができた。アセスメントは作成するだけでなく、その後の実行から評価を経て、修正を行っていくことでより良い支援を行っていくことができると学んだ。

■研修生レポート（３）

講義及び事例から、ストレングスとウィークネスの視点で考える演習を行い、ストレングスモデル、アドボガシー、エンパワメントの概念について再確認することができた。特に演習では、パワーレスになる、あるいは支援者と信頼関係を作れない本人の立場を体験することができた。このように客観的に振り返ってみれば気づけることも、実際に自分が担当している現在進行形の事例では、マイナスの関わりをしてしまうことがあると思われ、第三者も入れた事例の振り返りを適宜行っていくことが大切だと感じた。また、デマンドとニーズの違いを考へることや、それでも本人の言葉を大切にお付き合いしていくことについて考へていた時期だったので、就労を希望している事例の演習を通し、自分は障害特性から考へがち傾向が強いことに改めて気づき、支援や他機関との連携等の際にはそのことを意識しておくことが必要と感じた。

支援計画を作成するグループワークにおいては、どれだけ具体的な計画を立てられるかは、地域の情報をどれだけ知っているかにもよると感じた。一機関、一担当者の抱え込みではなく、それぞれの背景や強みを生かし、共通理解を図りながら連携して支援を進めて行くことが必要と感じた。また、異なる立場、背景を持つ支援者間で、考へを共有したり、意見の擦り合わせを行い、今後の支援につなげていくためには、事前の準備やコミュニケーション能力、人間性が重要であると感じた。

■研修生レポート（４）

自身は、当事者の苦手とする点や社会性に焦点を当てて支援方針を検討する場合があります、そのため、社会生活の上で身に付けておくべき事柄などの苦手意識に触れる場合もあり、当事者の社会参加等に対する自信感情やモチベーションの維持が継続しない場合もあった。

本講義から、当事者の得意・長所にも焦点を当てて支援方針の検討を行うことで、当事者の自主性や主体性を重んじた支援を行うことが実現しやすくなると学んだ。

また、地域の社会資源の活用方法にあたっては、関係機関が実施している支援内容や職員との面識のみならず、実際の雰囲気や“どのような状態の者に適しているか”にまで至って把握するため、支援を行う者が関係機関を見学し、これらを適確に認識した上で、本人の目的や状態に応じて他機関に促すことのできるスキルが必要であると再認識した。

グループワークでは、それぞれの立場から支援方針を提案し合い、様々な視点から支援計画を考えることができた。他の専門家や支援者との協働について、実際に利点や有効性を体感できる機会となった。

■研修生レポート（５）

本講義では、ソーシャルワークの歴史及びアウトリーチ支援の基礎に関して学ぶ機会となった。特に利用者のニーズの捉え方、その上での支援の取り組み方に多くの気づきを得られたのではないかと考える。支援者が見た「解決志向アプローチ」、「病理学的アプローチ」に傾きがちになっていたのではないかと反省をする機会にもなったと考える。その対になるアプローチとして「ストレングスの視点」、課題や“弱さ”に傾注するのではなく、利用者が持つ“強さ”に注目する視点の必要性を再確認できた。それを通して、利用者のアドボカシー、と同時に支援者自身のセルフ・アドボカシー、への取り組みを設計することが重要である。また、そういった設計をするためには、エコマップやジェノグラフといった可視化、支援計画の重要性を再確認することにもつながった。何より、グループワークを通して、支援者個々の差異に気づけたことも大きな収穫であったと考える。

■研修生レポート（６）

講義から「視点」の持ち方について学ぶことができた。支援対象者と関わる際の視点としてストレングスとウィークネスがあった。多角的に支援者を捕えようとしつつも、ついウィークネスへ目が向き改善することをばかりに囚われてしまいがちな部分があった。私の所属する施設では再犯の防止と言う目的があり、私自身ウィークネスに注目しがちになるが、本人の長所についても知りアプローチしていく必要があると感じた。また、ソーシャルワークについて、人と家庭や学校などの環境との関係性を改善することについて学べた。本人に対する理解のみでなく、様々な施設などと連携を取り繋いでいく役割も求められていた。

■研修生レポート（７）

この度はこのような貴重な機会を通し、これからの支援のあり方を教えていただき、心より感謝申し上げます。今までの考え方を見つめ直し、自分の課題を一つ一つ吟味し修正を加え、これから役立てていきたいと思っています。

これまで「自立支援」を最終目標にして支援の仕方を模索してきましたが、もう一度原点に立ち返り、自分たちの支援の「姿勢」という最も根本的な部分から考えさせられました。一般的なケース会議などでは、当事者の欠点や問題点、弱さやできない部分に目を向け、「どうしたら本人の気持ちや考え方を変えられるか」に重点が置かれてきたように思います。それはますます本人を追い詰めて行ってしまうことに案外誰も気づいていなかった部分ではなかったかと思えます。

引きこもる若者が年々多くなっている現状を見るときに従来型の支援では限界があり、支援者も疲弊してしまうことが多くありました。門田先生が提案される、長所や才能に目を向け、引き出していく方法は本当にこれからの求められる支援ではないかと大変感銘を受けています。

肩書を外して寄り添うな関係を持つこと、また支援する側とされる側という固定された関係のみならず、少しずつでも本人の心が晴れて行けば、支援者も意欲的になります。その方法と具体策は現場において、クライアントによって一人一人違いが出てきますが、本人が「自分の可能性に気づき自主的に促すこと」に焦点を当てた支援が、これから求められる支援法ではないかと思いました。支援者との対話がヒントとなり、当事者自身が自分自身の心の状態を認識できるようになれば、客観的に自分を見つめられるようになります。支援者の励ましや言葉によって自分の可能性を感じる中から自分を見つめ直せるので従来とは全く違ってきます。

そのような支援者側の根本的な姿勢や見つめ方が変わることで、救われる若者が増えるのではないのでしょうか。支援者側の前向きで積極的な視点によって活用できる資源の情報提供や選択肢も違ってくるものと思います。今後に生かしていきたいと思っています。ありがとうございました。

■研修生レポート（８）

ケースマネジメントの展開はアセスメント（ニーズ把握）→支援計画（短期計画、長期計画）作成→この時点で本人・家族の思いを尊重し、支援計画を実行する→実行結果を評価（モニタリング）する。この中で、アセスメントは本人、家族、場合によっては親族などを対象に実施することも必要である。支援計画には、フォーマルな支援やインフォーマルな支援を行うとともに、他機関の専門職のネットワークを活用する。このネットワークは重要であり、定期的に

接触し、インフォーマルな関係を深めて効果的なチーム対応ができるように準備しておく。また、本人の弱さを見る医学的なアプローチではなく、本人の強さ（ストレングス）の視点に着目し、未来志向で支援していくことが重要。

■ 研修生レポート（9）

本講義では、各々の職種や支援機関の特徴を活かしながら連携する際にポイントとなるいくつかの視点について学びを得ました。ワークを通して、同じ事柄でも視点が違えば、捉え方や理解も大きく異なるということを改めて感じました。連携の際のポイントとして、まず、本人の strengths に着目することが必要だと感じました。さらに、支援の意図を明確にすることが大切だと感じました。支援する側の意図が不明確な場合、本人も先が見えず、不安になります。誰がどういった役割を担うのかを具体的に考えること、その際に誰がアプローチするとより効果的なのかという視点も大切だと感じました。以上のことを踏まえて所属する機関の役割を再度振り返ると、当cは入り口の支援を担っており、支援計画を検討し、コーディネートし、多くの機関をつなぐという役割であると思われます。多面的なアプローチを可能にするためにも、日頃からのネットワーク作りが大切だと改めて感じました。

■ 研修生レポート（10）

社会福祉という概念には様々なものを含んでいるが、その存在の前提として、社会福祉が実現していない時代もあったといった逆説がある。社会福祉（ソーシャルワーク）の歴史的な経緯についてアメリカを事例にして学ぶことができた。

ここでは、大きく慈善組織協会とセツルメント運動というスタンスの違う2つのアプローチからのソーシャルワークの成り立ちを学んだ。これらの活動はどちらも明治の日本にももたらされている。

その中でもセツルメント運動は現在のソーシャルワークの基盤にあるストレングスで物事をみる視点の源流があるように感じられた。また、ストレングスの視点について多彩な具体事例やグループワークから実際に観察することができた。

■ 研修生レポート（11）

講義では、利用者に対してマネジメントしていく際、いくら良い支援計画であっても、利用者自身が納得していない計画は良い計画であるとは言えない。支援者は利用者の弱さや問題点に注目するがそれは本来利用者が持っているストレングス（強さ）を見逃してしまう。事例を挙げて（僕の了解を得ずに部屋を片付けられた）の説明は分かりやすかった。

午後からのグループワークでは、他機関の協働についての大切さと難しさを学んだ。「それぞれの立場から支援計画を考える」際、同じ教示を受けたにもかかわらず、様々な「○△—」を描いてしまうのだと、とても分かり易く理解できた。その上で他機関同士が連携し、利用者が納得し、利用者の意向を取り入れながら支援計画を立てる事が大切であると考えている。

■ 研修生レポート（12）

社会福祉（ソーシャルワーク）実践の起源におけるアウトリーチに関する基礎的な事柄から、現代で求められているアウトリーチやケースマネジメントの展開過程など丁寧な講義で分かりやすく学ばせて頂きました。

虐待や引きこもり等、困難を有する子ども若者支援では、システム指向モデル（公的サービスの調整）で、支援を拒否された場合は、どう支援をしていくのか?と支援の行き詰ってしまう場合、利用者指向モデル（利用者のニーズを尊重）でのケースマネジメントを実施することにより、フォーマルおよびインフォーマルな支援と活動のネットワークを組織、調整、維持することを計画する人（もしくは）チームの活動の大切さがより深く理解できアウトリーチ支援の重要性を痛感しました。

また、利用者には、それぞれの強みや活用できる資源などのストレングスがあることを学び、本人ニーズを尊重したアセスメントをより実施するために「アセスメントにおけるストレングスの視点」が、支援計画や実行するにあたっての関係機関との連携等（チーム支援）や、モニタリング PDCA サイクルの基本が利用者利益につながることに、あらためて気づかされました。個人問題として捉えるのではなく、社会問題として（人と状況の関係性で捉える）情報収集（ア

セスメント)し、地域の関係機関や社会資源を活用した支援の実践を今後、試みたいと思います。ありがとうございました。

■研修生レポート (13)

社会生活の目指すものは「誰もがしあわせな生活」を過ごせる社会で、これからは地域の中で生活を支えていく人材を作ることがその社会形成につながるということを学びました。

訪問に際しては「弱さ」や「問題」の視点だけではなく、「ストレングス：強さ」の視点で利用者を主体におくこと、ニーズとは本人のニーズであってそれを尊重し、それに基づくアセスメントが大切であると学びました。

ソーシャルワークとは人と環境の関係を改善するところで、そのための地域のネットワークが重要であり、つなぎ役であるコーディネーターの必要性を痛感しました。

また事例を挙げての支援計画の展開の方法が具体的に示されてアウトリーチケースマネジメントの実践に大いに参考になりました。

■研修生レポート (14)

主に心理学では個人の内面へ、社会福祉は状況や関係性へ働きかける。アウトリーチは家庭に出向き、本人及び家族にサービスの情報やサービスそのものを提供する。その際は、利用者のニーズ(想い)やストレングス(長所)に着目し、利用者と一緒に目標設定や支援計画策定を行う。関係機関との協働においては、誰がいつ具体的に何を行うのかを踏まえる。その為には、地域の社会資源を熟知していることが不可欠である。また担当者と親しくなり、インフォーマルなつながりを持つことも支援を円滑化する上で重要である。グループワークではジェノグラムとエコマップにより家族や関係機関を可視化し、改善すべき点の共通認識を作ることができた。また、社会資源が身近になれば開発する必要性を学んだ。

■研修生レポート (15)

○1 ソーシャルワークの意義と変遷について

社会福祉の変遷を貧困対策の視点から学んだ。慈善活動からセツルメント運動、自己責任論から社会改良運動の流れの整理とアドボシーに基づいたソーシャルワークの中の訪問支援の必要性やスクールソーシャルワークの起源が整理できた。

○2 ノーマライゼーションと地域生活支援

福祉がとらえる当事者の社会的自立についての考え方がノーマライゼーションの理念まで発展し、地域での生活支援のためのケースマネジメントとアウトリーチが大きなポイントとなってきたことを学べた。特に支援に関する「ストレングスの視点」については当事者のエンパワメントに深く影響するものと再確認できた。

○3 連携のポイントについてグループワークを通し学ぶ事ができた。

■研修生レポート (16)

ストレングス視点について、グループワークでは、例えグループのメンバーひとりひとりの考えるアプローチや視点は異なっても、「ストレングス視点に立つ」というポジションを共有する事で、異なる観察や意見や興味がひとつの方向性にまとまっていく原動力の基盤になった気がします。被支援者に対してのみストレングス視点を用いるのではなく、支援の内容や質をアセスメントする際にもストレングス視点を用いる事が有効なのではないかと思いました。例えば、「支援者側がせっかく〇〇したけど被支援者が拒否した」「被支援者に△△させられなかった」という視点から現在なされている支援内容を振り返るよりは、「うまくいった・通じ合った・信頼を築けたと感じた瞬間」や、それらの瞬間がどういう経緯で生じたのか、支援者のどのような配慮、行動、言動がそのように功を奏したのか、というストレングス視点から振り返れば、支援する側の葛藤、ストレス、バーンアウト等も最小限に抑えることができるかもしれないと思いました。

■研修生レポート (17)

面談について、来所型とアウトリーチ型双方の特性を踏まえたうえで、対象者にとって一番